

## 朝鮮資料における条件表現の一特性：朝鮮語対訳との関係から

申，忠均  
九州大学大学院博士課程平成9年修了

<https://doi.org/10.15017/9404>

---

出版情報：語文研究. 83, pp.1-11, 1997-05-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 朝鮮資料における条件表現の一特性

——朝鮮語対訳との関係から——

申 忠 均

一

日本語史の資料の中に、所謂朝鮮資料という類のものがあり、それらに「日本語と朝鮮語との対訳という形で提供されていることがすでに極めて独自の価値」があることは、再三言うまでもない。同資料の対訳という側面は諸先学によって検討されてきたが、就中、安田章氏の「対訳」(『国語国文』三五—六)<sup>2</sup>は、対訳の問題を扱う際の良き試金石になると言えよう。

本稿は、その対訳のことに着目して、朝鮮資料の代表格とでも言える『捷解新語』(原刊本と改修本を対象とする)と『隣語大方』、並びに『交隣須知』の条件表現形式の一部について検討し、同資料に或る対訳上の対応関係が認められることを論じ、さらに、その裏には江戸初期の日朝の語学者が共有していた、ある種の対訳意識が有ったろうことを論証することを目的とするものである。

二

嘗て、『捷解新語』における原因・理由表現の推移を検討したことがある。その際、原刊本から改修本への改修の傾向として、「ほどに」の踏襲、「ほどに」から「により」・「ゆえ」への改めという方針を読み取り、その改修が上接語・呼応する後件文の内容などから、日本語史の「ほどに」の衰退と「によって」の成長を反映する可能性のあることについて論じた。なお、改修本における「により」・「ゆえ」が口頭語の「によって」の文章語的な変容であることを究明し、さらに、なぜ「により」・「ゆえ」が併用されたのかについても少しばかり考えてみた。本稿は、その併用の理由を朝鮮語対訳との関係から説明できるということの論証から始めることにしたい。

『捷解新語』の原刊本から改修本へ原因・理由表現の改修様相は前稿に譲ることにして、早速「により」と「ゆえ」の朝鮮語対訳に目を移すことにしよう。まず、改修本に五五例有る「により」だ

が、その朝鮮語対訳は、

○其方初めての事で御座るにより、代官衆が、御伴は申ませうが、[ʔi-i-si-ni] (改一9ウ)

○斯様好い日和に御会い成されましたにより、此先は万事が障り御座りますます、[ma-na-si-ni] (改六20ウ)

などから見るように、「ni」という接続語尾が主流を成しており、五五例のうち四九例（八九%）にも上る。ところが、この朝鮮語の「ni」という語尾は、

○内に居まするほどに、皆々御同道成されて御出成されませう。[i-se-o-ni] (改一3)

の例からもわかるように、「ほどに」の対訳としても用いられているものである。其の實、改修本の一四二例を数える「ほどに」の全例の対訳に、「ni」が当てられていたのである。改修本における「により」が、「ほどに」の用法を蚕食していく「よって」の姿を示唆してはいるものの、その対訳は、「ほどに」の対訳の「ni」に傾斜していることは注目し値しよう。

他方の「ゆえ」は、「により」とは趣を異にしている。改修本には四九例の「ゆえ」が現れているが、「ほどに」・「により」と対訳として共有している「ni」が「ゆえ」の対訳に当てられているものは一三例（二七%）に過ぎないのである。反面「ゆえ」の対訳としては、右の「ni」ではなく、接続語尾の「ki-yai」と「mai」(以下、両者を併せて、非「ni」ということにする)が主軸を成している。

○風も好う吹きまするゆえ、定めて船が参りませう、[pu-rai-ki-yai] (改一11ウ)

○居所も御念入れられましたゆえ、綺麗に御座つて、

[nyam-nye-ha-si-ki-yai] (改五30)

○余り残り多御座りまするゆえ、又一遍廻しませう。

[sep-sep-ha-o-mai] (改一8ウ)

などの三二例（六五%）がそれであるが、特に、改修本の二五例（卷十の五例を除く）の「ki-yai」のうち、九二%に当たる二三例が「ゆえ」の対訳であることは注目して良からう。この「ki-yai」と「mai」という接続語尾はいずれも、用言の名詞形語尾「ki」・「ni」に格助詞「e」が接した形のものである。これらは、形式名詞「ko(故)」に格助詞の付いて出来たもの、たとえば、

○信使より頻りに止めさしらるゆえ、太守船を押し寄せて、

[ma-ri-nan-故-to] (原八31)

のような「ko-to」と似ている構造をしているものでもあるが、原刊本での「ゆえ」の対訳が「ko-to」であったことは、示唆するところ大きい。

さて、ここで、朝鮮語の原因・理由の表現形式の、「ni」[ki-yai]「mai」の意味・機能について考えてみよう。まず、最も一般的な接続語尾は「ni」であるが、これは改修本において多用されていることから推測できるものであった。一方、「ゆえ」の対訳として主に用いられた、非「ni」の表現形式、つまり「ki-yai」と「mai」は「其原因理由の関係強く言ひ表はさる」ものである。これから考えると、前件と後件の因果関係の強弱によって、「ni」と非「ni」の併用を説明することが出来るのではないかとも思われるが、全巻を通して見ると、そう簡単には片付けられそうにない。

若しくは、「mai」が現代朝鮮語では用いられないことから推量される、近代朝鮮語での「mai」の勢力の沈滞や、「ki-yai」が現代朝

鮮語では「古めかしい語調で」<sup>13</sup>使われるという文体的特性などから、「ㄷ」と非「ㄷ」の用法差、なお、その延長線上にあらう「により」と「ゆえ」の併用を推察することも可能であらうが、本稿ではその可能性を言及することに止める。

現段階では、その理由の特定は出来ないものの、改修本における「により」と「ゆえ」が、対訳の面でそれぞれ傾向を異にしていることは認められるかと思う。ところで、この現象は、はたして改修本だけに限られたものなのだろうか。以下、他の朝鮮資料をも見てみよう。

『隣語大方』は、『捷解新語』とは違って、恐らく日本人の手による、日本人のための朝鮮語学習書であった。その資料的価値や性格などについては、安田章氏による解題などに精緻な研究が成されているので、ここでは措くことにして、早速本題に取り掛かることにする。なお、テキストとしては、もっとも古いものと思われる、安政六年書写の京大本『隣語大方』を用いることにした。

京大本『隣語大方』の原因・理由表現の表現形式には、「ほどに」の例が一例も無いことが特筆すべきであろう。それは、『隣語大方』が文章語を反映している資料という性格に起因するものと思われる。その結果、京大本では「により」と「ゆえ」の対立が出来るわけであるが、まず、「により」の例としては、

○謀<sub>レ</sub>事は在<sub>レ</sub>人、成<sub>レ</sub>事は在<sub>レ</sub>天と申により、…なるならずは、天にござりませう。〔在天・i-ra-ha-o-ni〕(11)

○さよふな事は、かねて謀<sub>レ</sub>りがとうござりまするにより、臨機応変して、自然と順便にいたすみちがござりませう。

【図謀-ha-ki-arye-se-o-ni】(11ウ)

などを挙げる事が出来る。京大本には「により」が一四四例ほど存するが、そのうち、一二五例(八七%)が右のような、朝鮮語本文の「ㄷ」の対訳として現れている。それに対し、

○年寄でござつて、目がみえかねまするにより、文字分明なのを求て下されたらば、忝ふ存しまするてござりませう。

〔po-ki-arye-o-mal〕(三4ウ)

のような非「ni」の場合は一九例(一三%)しかないのである。

一方、「ゆえ」の場合は、八一例有るうち、非「ㄷ」の対訳としての例が、

○われく日限内に、ご快方のほしがしれぬとござるゆえ、勢不得已下行でうけまする…、〔no-ter-ta-shi-mal〕(11ウ)

○必ずしてこいと云て、わさく仰せこされたゆえ、かやうにねん入てきましたに、〔寄別-ye-se-mal〕(三1)

など、七七例(九五%)を数える。しかも、本文の朝鮮語の「ㄷ」の対訳として現れている「ゆえ」の例は皆無である。なお、八一例のうち、六八例(八四%)が朝鮮語本文の「mal」の対訳であることにも注意してよからう。とすると、非「ㄷ」の一方の「ㄷ」はどのような状況下にあるのかという疑問が湧いてくる。次の例を見よう。

○とく其のさはござりますれとも、くわしかりませぬにより、將に信し將に疑ても居ましたに、

〔仔細-oi-ani-ha-ki-mi〕(16)

○大邸人参ををそく送り下しまする故、…をかえりが又一つをくれまする…、〔送-ha-da-pa-ki-yai〕(四1ウ)

のように「[ki-yai]」の対訳の箇所は「により」(11例)や「ゆえ」(九

例)が見えはするが、

○咫尺を辨へえませぬにつき、何方にまいりましたも存しませぬ。  
[sar-pi-ci-mos-sha-ki-mi] (12ウ)

のように、一七例の「[ki:yei]」は対訳として「につき」を取っており、「[ki:yei]」は主に「につき」と対応していることがわかる。

改修本『捷解新語』との詳細の異同はともかく、巨視的な立場から見ると、京大本『隣語大方』の「[pi:]」は「により」、非「[pi:]」は「ゆえ」(そのうち、「[ki:yei]」は「につき」にも)という対応関係を認めることが出来る。要するに、京大本『隣語大方』における、日本語の原因・理由の表現形式と朝鮮語のそれとの間にある対応関係も充分意味を持つと思われるのである。

さて、朝鮮資料の一つに『交隣須知』というものが存することは周知の如くであるが、その『交隣須知』は、朝鮮語学習書という点では『捷解新語』と異なり、また、辞書類という点では『隣語大方』とも異なる性格の資料である。この『交隣須知』については、諸論考を通じて多くのことが明らかになってきてはいるものの、未だ不明な点があることも事実であろう。しかし、本稿の課題である、日本語と朝鮮語の原因・理由の表現形式に関わる対訳関係を検討するに当たっては、些かの問題はあるにせよ、さほどの障碍にはならないはずである。故に、『交隣須知』そのものの資料的性質等に関しては割愛することにし、早速「により」・「ゆえ」とその対訳の朝鮮語の関係を見ていくことにする。なお、本稿でテキストとして用いたのは、原『交隣須知』に最も近いとされる、京大言語学研究室が複製刊行した京大本の『交隣須知』である。

まず、「ほどこ」の状況を見ると、京大本には九例しか見当たらない。

く、『隣語大方』同様、『交隣須知』所在の日本語の文章語性を語っている。なお、その「ほどこ」の対訳には、

○鐵櫃 ひじつほがぬけたほとに、うちなをせ。

[spa-cye-sin] (15ウ)

など、八例に「[pi:]」が用いられており、『捷解新語』・『隣語大方』の様相と変わりはない。

ところで、二五二例にも上る京大本『交隣須知』の「により」の方を見てみると、

○星 星が天にひか／＼するにより、てうとひぼのきれた玉の

よふにつきさる。[oyon-ya-ye-sin] (11)

○鳳 鳳凰は神雀じやにより、みたい。

[sin-cyak-i-ni] (11)

など、二四六例が本文の朝鮮語の「[pi:]」の対訳としてのものであることがわかる。全「により」の例の九八%にも及ぶものが、「[pi:]」の対訳であることは、右記『捷解新語』や『隣語大方』の傾向の極致とも言えよう。例外は、

○廊 ながやがそんしたにより、けらいどものねるところもな

く、めいわくにござる。

[syan-ha-ye-se-ki-mi] (14ウ)

○侵 をかすにより、やむことをえず、ふせきまする。

[cim-no-he-mai] (34)

の、五例の「[ki:yei]」と一例の「[nai]」だけである。

一方の「ゆえ」は、「[pi:]」との対応関係を克明に表している「により」とは対極にある。三二例数えられる「ゆえ」は、

○株楼 いたしきはいたをししくゆへ、さむうござる。

などの二例を除く、二八例(九〇%)が非「*hi*」の対訳の箇所に表

れている。<sup>16)</sup> 内訳は、

○白髪 いっぱいでたゆえ、かゆふこさる。

[*ke-tak-na-mai*] (一五)

○一定 きわめてなつてきましよふゆゑ、そのよふにせづかし

やるな。 [*tot-tus-ha-mai*] (四一四)

など「*mai*」の対訳としてのものが二二例、「*ki-yei*」<sup>17)</sup>のそれとして  
のものが、

○漸 たん／＼しがあかつてゆくゆえ、のちにをよふものがあ

まじ。 [*nu-ro-ka-ki-wi*] (四三二)

など六例ある。三二例のうち、二八例が非「*hi*」の対訳としてのもの  
であり、これも九割という高い数値を占めているのである。要する  
に、京大本『交隣須知』における「により」と「ゆえ」の対訳の傾  
向も、『捷解新語』の改修本・京大本の『隣語大方』のそれと軌を一  
にしていることがわかった。

ここに来て、『捷解新語』の原因・理由の表現形式の改修の裏に、  
朝鮮語対訳との関連があることが明らかになってきたかと思う。  
「により」と「*hi*」「ゆえ」と非「*hi*」という、対訳上の密接な対応  
関係を確認することが出来、改修の際に右記の対訳意識が働いたと  
思うのである。なお、『捷解新語』での原因・理由の表現形式の対訳  
の傾向性が一過性のもではなく、『捷解新語』以来の朝鮮関係資料  
にも綿々と流れていることも判明したかと思う。

## 三

朝鮮関係資料における逆接仮定条件の表現形式からも、ある種の  
対訳意識の存在を確認することが出来ると思われる。

まず、『捷解新語』から見えていくことにしよう。原刊本では逆接仮  
定条件を、古代語の「とも」と近代語の「ても」などが担っており、  
その数はそれぞれ一五例・二七例有る。なお、この新旧両形の併存  
には表現論的立場からも、成立論的見地からもこれといったほどの  
特徴を見出すことは困難のようである。<sup>18)</sup>

そこで注目したいのが、「とも」と「ても」に当てられている対訳  
の朝鮮語である。逆接仮定条件の対訳として用いられている朝鮮語  
の表現形式(接統語尾)は概ね二通り有る。「*to*」と「*hi-ta-to*」  
がそれであるが、現代語においては共に「中立的譲歩」表現を担う  
もので、意味用法は大同小異のものようである。<sup>20)</sup>

ところが、原刊本の「とも」には、

○遅れた船が何方へ著くとも、明日聞き付けて見さしられ。

[*pus-ta-sya-to*] (原一四二)

○假令、我人差合有るとも、御振る舞いに反する事は、御座る

まい。 [*i-si-si-ta-to*] (原九九)

のように、対訳として「*to*」と「*hi-ta-to*」の両者が用いられ、そ  
れぞれ七例づつ(巻十の一例は対訳を欠けている)当てられている  
のに対し、二七例の「ても」には、

○申しても申しても後へ戻る様な御心持ち、さてさて呆れた御

存分で御座る。 [*ni-ru-to-rok ni-ru-to-rok*] (原四二三)

のような「修辭的仮定の用法」<sup>21</sup>のものの三例を除く二四例のうち、

○此の様な公木は、何程入れても、え取りまるするまいほどに、

〔mu-ya-to〕(原四11)

○彼方から如何言うても、受け取る仕儀ではないが、

〔hi-ra-to〕(原八8)

など、二三例(九六%)に「e-to」が付されている。他方の「ri-ra-to」が用いられている例は、

○仰しらる所専ら然う御座るとあつても、…各々の目にも見

ようするに、〔ku-ra-hi-si-ra-to〕(原四13)

の一例しかない。右の例外があるにせよ、「ても」と「e-to」との対訳パターンを認めることが出来ようが、この両者の関係は改修本になつても崩れることなく受け継がれることが見受けられる。改修本の三五例(修辭的用法の二例を除く)の「ても」のうち、三〇例(八六%)が「e-to」と対訳されているのに対し、対訳「ri-ra-to」は二例にしか見当たらないのである。

この「ても」と「e-to」とを結ぶ強い対訳意識があったことは、原刊本で「e-to」の対訳を持っていた「とも」のうち、例えば右の原一12の例が、

○遅れた船が何方へ着きましたも、…明日聞き合わせて見さつ

じやい。〔pu-ta-sya-to〕(改一18)

のように、「ても」に改められていることから窺える。また、

○假令正官人御氣相御座るとも、茶禮はそつとの間ぢや程に、

出でなさいされて〔ya-u-ri-mu-si-ri-ra-to〕(原一29)

○假令正官人の御病氣じやと申ても、茶禮は暫時の間で御座る程に、御出なされて〔bi-ri-ra-hi-na-to〕(改一44)

の場合には、内容を若干変えるとともに、表現形式も「とも」から「ても」に改め、さらに、凡例に見る如く「我語一従旧書」のはずの改修本において朝鮮語の対訳をも殊更「ri-ra-to」から「e-to」に改めていることからも、「e-to」と「ても」に纏わる対訳関係は立証されるかと思われ。つまり、改修者たちの意識の中には、「ても」と「e-to」、「とも」と「ri-ra-to」がそれぞれ「相値」するものという意識があつて、「不相値者」の「ても」と「ri-ra-to」、「とも」と「e-to」は「即不得改正」<sup>23</sup>しなければならなかつたのであろう。

さて、右のような逆接仮定条件の表現形式の「とも」・「ても」と「ri-ra-to」・「e-to」に関わる対訳意識は、朝鮮側の独自のものであつたろうか。否、日本側の通事の間にも同じ意識はあつたようである。それは、日本側の朝鮮語の学習書である『隣語大方』における逆接仮定表現にも「ても」と「e-to」との関係を強く示唆するものがあることから窺える。

まず、京大本『隣語大方』の場合から検討していくことにするが、京大本には古代語の形式の「とも」が、

○貴国は文筆が各々勝れて居ます共、時々文字に点画が違ひまするにより、〔yon-ha-o-to〕(一1)

○立派な人は下問を耻じずとも、小人何事でも人に尋る儀を耻じまする故、〔不耻下問 ha-to〕(二10)

○私の詞を御取り上げ成さりよふとも、御取り上げ成されまいとも、誠を以て少も害の無いよふに致して、

〔施行 ha-si-na 勿施 ha-si-na〕(四5ウ)

の三例ある。このうち、一1の「優れて居ます共」は、文脈上、なお一般に逆接確定を表す、本文の朝鮮語「to」からも「優れて居

ますれ共」が期待される箇所であり、<sup>24</sup>レをルに間違った誤写と思われる。二六も同じく文脈からも対訳朝鮮語からも、確定接続が予想されるところにあるもので、朝鮮刊本『隣語大方』に同箇所を求めると「恥ませねども」とある。なお、四五ウの「〜とも、〜とも」は、対訳朝鮮語に「na, na」とあることからわかるように、列挙・選択用法のものである。結局、京大本『隣語大方』には逆接仮定条件の表現形式としての「とも」は一例も認められないことになる。それに対し、新しい表現形式の「ても」は、四三例あるが、逆接仮定接続としては不自然なものを除くと、四〇例が逆接仮定条件の表現形式としての「ても」と認められる。そのうち、次の三例には注意が必要であろう。

○御恩は白骨に成ても、忘れ難とふ御座ります。

「白骨難忘 *ri-pap-to-soi*」(一三)

○此方じゃと申ても、了簡のあるまいものでも御座らねども、

「*in-yak-in-tum*」(一六)

○酒を食へてからは、失体しても何ぞ咎むるでは御座らねども、  
も、「失體 *ari-ta*」(四二)

二三は朝鮮語側が漢文体になっており、「ても」とその朝鮮語の問題を考へることは難しい。二六の例は、「*u-tum*」という朝鮮語本文の対訳として現れているものであるが、この「*u-tum*」というのは、「讓歩と反問の意」を表すものである。四二の場合には現代朝鮮語には存しない用法のものではあるが、やや畏まった文章語体の讓歩の意を持つものと思われる。<sup>30</sup>

ここで、当面の対訳の問題、つまり「ても」と「*e-to*」の対応関係に戻ることしよう。京大本『隣語大方』での、右記の例を除いた

残りの三七例の「ても」の朝鮮語の対訳を見ると、

○たとふ扁鵲が居ても、救ふ道がござりませぬ。

「*pi-tok* 扁鵲 *ri-i-syo-to*」(一一ウ)

○私ごときどんぶものはいかになるふても、曉りえませず、

「*pa-mori* *pai-ho-to*」(二一〇)

などのように、三五例(八八%)の「ても」に「*e-to*」とあって、例外は、

○いかに御繁多な申ても、を著なりともなされて、をかへり

なさるゝを希ます。〔紛擾 *pa-po-si-ri-ri-to*」(二一〇ウ)

○詞をなろふと云ても、みやこの人よりならふよふになされま

せ。〔*pai-ho-ri-ri-to*」(三二〇ウ)

の「*ri-ri-to*」をとっている二例だけである。このことから、『捷解新語』だけではなく、京大本『隣語大方』においても、「ても」と「*e-to*」の強い対応関係を認めることが出来る。

ところで、『捷解新語』においては、「*ri-ri-to*」は概ね「とも」との対応関係が認められたが、京大本『隣語大方』ではどうであろうか。右のように、「ても」との組み合わせはあるものの、基本的に「*ri-ri-to*」の相棒は「ても」でも「とも」でもなく、「とても」である。京大本には四例の「とても」が数えられるが、その四例ともに対訳として「*ri-ri-to*」をもつ。次に例を挙げる。

○なんのけいこをするとても、一度によけいに習へば、委しかりませぬから、

「*u-tar* *har-ri-to*」(一五)

○たとへ福者にならんとても、あまり難儀にならうにくらす

だけにはござります。〔*mos* *toi-ori-ri-to*」(四一六)

要するに、京大本『隣語大方』においては、「ても」は「*e-to*」にと



ても」は「*tri-rato*」という対応関係が認められ、「とも」か「とて」かの差はあるものの、『捷解新語』の場合と同じく、逆接仮定条件の表現形式とその対訳朝鮮語との間にある対訳意識が働いていたことが確認できるかと思う。

では、次の問題として、京大本『隣語大方』における、この対訳関係が京大本だけにあるものなのかどうかを検討する必要がある。ここで、『捷解新語』と同じく朝鮮の地において朝鮮人の日本語学習を目的に印刊された朝鮮刊本『隣語大方』を見ることにしよう。朝鮮刊本には「とも」の例が八例あり、その朝鮮語対訳には三例に「*tri-rato*」が、四例に「*to*」がそれぞれ現れている。一方の「ても」は五九例を数え、そのうち五二例(八八%)が「*to*」と共に起し、「*tri-rato*」と共に現れるものは一例もない。なお、「とてとも」の場合、一〇例有るが、四例が「*tri-rato*」と、また四例が「*to*」と共に起している。なお、対訳朝鮮語の方に「*tri-rato*」と似た構造をしている「*tri-yan-tyan*」が一例現れていることも特筆に値する。<sup>32</sup>これから、朝鮮刊本『隣語大方』の場合も、京大本『隣語大方』同様、逆接仮定条件の「ても」と「*to*」の対応関係が、大概認められるかと思われる。

さて、前に触れたように、『隣語大方』に見られる日本語は口頭語ではなく文章語であるという指摘が成されている。となると、ここに一つの疑問が湧いてくる。それは、右に見た如く、『隣語大方』の逆接仮定条件の場合は、文章語の「とも」や「とてとも」ではなく、口頭語の「ても」の方が圧倒的な主流を成しており、この「ても」優勢の理由は那辺にあるかのことである。筆者はその答えを右に見たような「ても」と「*to*」との強い対応関係に求めたい。周知の如

く、『隣語大方』は朝鮮語を本文としているが、朝鮮語通事(朝鮮刊本の場合は編纂者)は今まで述べてきた対訳意識に捕らわれ、「*to*」を機械的に「ても」に置換していったのであろう。その結果、『隣語大方』全体の文章語脈に相応しくもない「ても」の方が多用されることになったのではなからうか。<sup>33</sup>

だとしたら、『隣語大方』と同じく朝鮮語学習書として編まれた『交隣須知』も傾向を共にしていることが予想される。『交隣須知』の逆接仮定条件の表現形式の状況を調べることにするが、ここでは前節同様、テキストとして京大本を用いることにしよう。京大本『交隣須知』には、古い形式の「とも」が七例あるが、

○啄 いっそにわたりの口になるとも、牛のしりあになるな。

[*toi-ci-yan-tyan*] (一四ウ)

○水路 水路はたとあはやふゆくとも、あぶないにより、

[*pi-rok sui-i kato*] (二四)

のような「*tri-yan-tyan*」の対訳としてのものが二例、「*to*」の二例有る他に、「*toi*」などの対訳としての「とも」の例も見られ、<sup>34</sup>これらの様子が朝鮮刊本『隣語大方』と類似していることが窺える。但し、朝鮮刊本『隣語大方』と相違している点として、「とてとも」の例が皆無であることが特筆に値しよう。

一方、京大本『交隣須知』の「ても」の例をピックアップしてみると、七〇例を数え、『隣語大方』同様「とも」を遙かに上回っていることがわかる。これらの「ても」は、その対訳の朝鮮語本文と対照してみると、「とも」と出現する頻度の高い「*to*」系<sup>35</sup>のものが三例、「*tri*」をその対訳として持つものが四例あるものの、<sup>35</sup>「*to*」の訳語としての例が、

○櫻桃 ゆすらはたんとかふても、がいにはなりませぬ。

[man-hi nak-o-to] (二31)

など、五八例(八三%)と多数を占めている。予想していたとおり、「ても」と「yo」との関係は確固たるものであった。京大本「交隣須知」における逆接仮定条件の表現形式の様相も、『捷解新語』・『隣語大方』などの他の朝鮮資料のそれと近似していたのである。

#### 四

以上、朝鮮資料に見られる、原因・理由表現と逆接仮定条件の表現形式の対訳問題について検討してみた。その結果、原因・理由の表現形式の「ゆえ」と「Kiyai」・「nai」が対応関係を成していること、また、逆接仮定条件の「ても」と「yo」が対応していることが明白になってきた。これらの現象から、近世初期の日朝間の語学者の間に、ある種の対訳意識があったろうことも論じた。

なお、『捷解新語』の原因・理由の表現形式の「により」と「ゆえ」、逆接仮定条件の「ても」と「とも」に関わる改修に、その対訳意識が働いていたことも立証できたかと思う。また、文章語で綴られているとされる『隣語大方』において、口頭語の「ても」が専ら用いられていることの理由をも、この対訳バターンの存在で説明した。

が、本稿で検討してきた、対訳上の対応関係は何故出来たのか、また、それには何らかの蓋然性があるかどうかの問題が、依然として残っている。日本語と朝鮮語との対照言語学的な研究にも繋がる、この課題については今後じっくりと考えていきたい。

#### 注

- 1 濱田敦、「はしがき」(『重刊改修捷解新語』、京都大学文学部国語学国文学研究室編、昭和三五)
- 2 後、「対訳の問題」と改題して、『朝鮮資料と中世国語』(笠間書院、昭和五五)所収。
- 3 申忠均、『捷解新語』の改修—原因・理由表現を中心として—(『語文研究』七八、平成六)
- 4 用例は読みやすさを図るため、『捷解新語』の場合は、平仮名だけの本文を漢字仮名交じり文に、『隣語大方』と『交隣須知』の場合は、片仮名文を平仮名文に、それぞれ直して挙げることにした。ハンゲル表記は、国語学会編の『国語学大辞典』(東京堂出版、昭和五五)の河野六郎式に依った。なお、用例文以外の本文中に挙げる朝鮮語形は適宜用いた代表形である。
- 5 「により」と「E」の対応関係については、既に、濱田敦氏の「接続」(『国語国文』三七—四、後『朝鮮資料による日本語研究』(岩波書店、昭和四五)所収)にご指摘がある。
- 6 この朝鮮語の「E」は、改修本において、  
○書契を見ますれば、島中御無事に御座って、  
[無事 hasim] (改一四ウ)  
などの、偶然確定条件の対訳を始め、非条件の接続や逆接条件にも用いられている。
- 7 ここでは「EyoE」を「E」の数の中にいれてあるが、別扱いする必要があるかも知れない。とすると、「EyoE」が「により」には6例しかないのに対し、「ほどに」には51例も用いられていることから、「により」と「ほどに」の差別化を謀ることが出来よう。其の裏、改修本の六〇例(巻十の五例は除く)の「EyoE」のうち、五一例(八五%)が「ほどに」の対訳として用いられている。
- 8 この数には、「ことゆえ」・「ものゆえ」の数が入っていない。なお、これらの対訳の傾向は、「ゆえ」のそれと大體同じである。

9 例を挙げれば、

○扱は、註進を懇ろに成されたと仰せらるるゆえ、安堵致しました。

[hi-tai-si-u] (改四11)

など。

10 李基文、『国語史概説(改訂版)』(塔出版社、一九七二)一六六頁参考。

11 前間恭作、『韓語通』(丸善株式会社、明治四二)一八二頁参考。

12 曹五鉉、『現代国語の理由語尾の研究』(金昇坤、『韓国語の助詞と語尾』(瑞光学術資料社、一九九二)四〇四頁参考。

13 大阪外国語大学朝鮮語研究室編、『朝鮮語大辞典』(角川書店、昭和六二)

14 京大本には「[ki-yai]と同じ構造の「[ki-ro]という表現形式が本文の朝鮮語に見えるが、ここでは同じものとして処理した。

15 例外の一例は、

○月がさへてさびしいほどに、話なしなり共いたしましよふ。

[sim-han-hai] (一一)

である。

16 他の一例は、「[a-se-ro]の対訳としての、

○騒雅 騒雅にして、たゞしいゆゆ、ひとりうけもたれました。

[an-ye-han tase-ro] (四18ウ)

である。因みに、「ゆえ」の対訳としての「[a-se-ro]は『捷解新語』(原九

7など)にも見られる。

17 「[ki-yai] (関連)とは、

○恰 たんのふするほととめてきたにつき、はつかしい事ない。

[a-to-oak-ki-un] (四37ウ)

の「[ki-yai]の例が一例存する。なお、京大本『交隣須知』に見る「につ

き」には、この一例しかない。

18 接続助詞「でも」による逆接仮定条件表現も存するが、扱わないことに

する。以下、他の資料の場合も同じ。因みに、「でも」には「[ra-to]とい

う対訳が付されている。

19 但し、成立論からしたら、森田武氏の内容・文体による分類によると、

(a)部には「とも」「ても」「ても」一五例とあり、両者が拮抗している

が、(b)部には「とも」が三例有るに過ぎないのに対し、「ても」は二

例を数える。(b)部の三例の「とも」を重視し、これらの数が成立論から

の意味を持たないと考えるが、見方によっては有意義なことも見得るだ

ろう。なお、書簡文体の(d)部には「とも」が一例有るだけである。

20 徐廷燮、『国語讀歩文研究』(翰信文化社、一九九一)参考。なお、

「[ki-yai]の文体的特性と同じく、現代朝鮮語における「[a-se-ro]が「古

風で堅い文体に用いられる」との記述が『朝鮮語大辞典』に見える。この

記述から、「[a-se-ro]を「とも」の文体的属性と関連づけて考えることが

出来るそうであるが、時代的な隔たりがあり、そのまま適用するのは無理

があるだろう。

21 塚原鉄雄、「ても・でも」(松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』、學

燈社、昭和四四)参考。

22 他方の「とも」と「[ra-to]との関係の癒着を語る例も見受けられる。

○此処で死ぬるとも、食ましよう。[uk-se-o-to] (原二7)

◎例え病気が起こるとも、食まするで御座ろう。

[pi-rok pyan-i nar-o-ra-to] (改二10)

の場合は、内容を「死ぬ」から「病気が起こる」に変える際に、対訳朝鮮

語の「[a-to]を「[ra-to]に改めている。これは、「とも」と「[a-to]との

不自然な共起を解消するためであったろう。

23 改修本凡例。

24 朝鮮刊本『隣語大方』には、「勝ましたれ共」とある。

「ても、ても」の例も一例ある。

○其の事は即今許諾成されても、年を経て許諾成されても、貴国の弊に

なるは朝三暮四で御座る処に、

[許諾 ha-si-na … 許諾 ha-si-na] (四14)

26 ○鉄物を分けて下さるゝ事に至りても、他人より若し少なう出ますれ

ば、自分の計ふたかか疑がわれまして、

[鉄物分給事 ha-ye-nan] (一9)

○福過災生と申でも、あまり仕合が良ければ、厄があると申すにより、  
「福過災生:ra」(三4)  
と、上注の例など。

27 文脈や対訳朝鮮語から逆接仮定が予想されるところに、他の形式が用いられている例が三例ある。

○左程まで仰付られずして、愚に致しませうか。

〔當付:ra-ni-ha-pp-sya-to〕(一4)

○いかに才が有ると云て、自称ばかりして人を蔑ろにしては、人が却て見下げます故、「ista-ha-ya-to」(一6ウ)

○一時に払ひ得ますまいけれども、成るだけ払うよふに致しませう。

〔備償:tun-mo-sha-or-ri-ra-to〕(三6a)

なお、これらの例の箇所を朝鮮刊本『隣語大方』に求めると、それぞれ「おしやれずとも」(四8ウ)、「有と云ても」(四12ウ)、「払ます事は成ませぬども」(六18)とある。

28 大阪外国語大学朝鮮語研究室編、『朝鮮語大辞典』(角川書店、昭和六一)

29 この「:ra」は、京大本『隣語大方』で、他に「貴国じやと申て」、「貴国:in-tum」(二2ウ)、「館門でも」館門:in-tum」(三6)にも見られる。

30 同じ朝鮮語本文に対して、朝鮮刊本『隣語大方』などには、「無礼が有たとて」(八7ウ)とある。

31 この例外の箇所を朝鮮刊本『隣語大方』に求めると、「如何に御急でも」(三25ウ)、「詞を習とても」(六19ウ)のように、それぞれ「でも」と「とても」が対訳として付されている。

32 ○典衣沽酒とて、それだけの御馳走を何しに致得ますまひか、

〔典衣沽酒:har-ci-ne-yeon〕(五14ウ)

33 このことは、もともとは朝鮮語だけのものではあった原『隣語大方』が、対馬などの地での学習の際に日本語の対訳をも盛り込んでいくことによつて、今に見るような体裁になったろうという成立論からも裏付けられるかと思われる。特に学習の初期段階では、対象言語のある表現を、それに一番相応しいと思う母国語の表現と対応させて覚えていく方法が取られるこ

とからも、想像できよう。

34 ○悟 すもうはちからがつよふてこそかつと云とも、てがあれはいよ

すくれると申ます。〔ki-ka he-to〕(三29ウ)

など。

35 ○悶 なんきなど云でも、うけもつより外はこさりませぬ。

〔min-man-har-ri-ra-to〕(四7a)

○荷且 やしつかえるに及ぶよそわしいわざをしようか。

〔ku-c'yar-har-ci-yan-oyan〕(四42ウ)

○恨歎 なげいたと云つて、やくにたちませぬ。

〔han-tan-han-tum〕(四6ウ)

などがある。